

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館
2013.9
第55号

十月十二日（土）、秋田県生涯学習センターにて第2回徳川林政史研究所公開講座 in 秋田「改革の幕開けく村と山の復興と秋田藩政」を開催します。お申込・お問合せは公文書館まで。

記念講演のご案内

当館では開館二十周年記念事業の一環として、我が国古代史研究の第一人者であり、元秋田大学学長、現県立博物館名誉館長である新野直吉氏による記念講演を開催します。

新野氏は山形県出身で皇學館大学に進学。学徒動員から復員したのち、東北大学史学科に入学生し国史学を専攻、卒業論文の国造論で古代史家として世に出ました。その後、同大学の講師を経て、昭和二十八年に秋田大学芸学部講師となったのが秋田との縁となりました。

一貫してフィールドワークを重視し、拓田の柵跡の保護の重要性を訴えました。また、北の海道論を提唱、『秋田美人の謎』を著すなど、新野氏により本県の歴史的イメージは大きく変わったと言えます。その深い洞察に基づいた秋田の歴史に関する講演、ぜひ多くの方々にお聞きいただきたいと思えます。

申込先 Ⅱ〇一八―八六六―八三〇一

●演題 「古代史上の秋田

― 秋田 北辺の鄙にあらざり―

●期日 十一月一日（金）

●会場 県生涯学習センター三階講堂

●時間 午前十時―十一時四十五分

●入場 無料

講演終了後、当館職員が希望者に開館二十周年記念展示等をご案内します。

有形文化財「北家御日記」に みる無形民俗文化財の変遷

～アーカイブズ講座第三回より～

開館二十周年記念展示「秋田県公文書館所蔵文化財展」は、九月二十三日（月）をもちまして前期展示を終えました。たくさんのご来場、ありがとうございました。

さて、最近街中でよく見かける「あきた自慢 二十二箇条」にもあるように、秋田県は竿燈やなまはげなど、郷土色豊かな祭りや行事で知られています。国指定重要無形民俗文化財の登録数（十六件）は、堂々の全国一位！！

九月七―九日に仙北市で行われた「角館祭りのやま行事」は、平成三年に文化財に指定されました。「オイサー！！」のかけ声でやまをぶつけあう勇壮な「やまぶつつけ」で知られるこの祭りにも、様々な変遷があったようです。

角館の所預である佐竹北家で書き継がれてきた「北家御日記」には、元禄期以降「薬師祭祀」で相撲を献じた記事がしばしば登場します。享保十七年（一七三二）八月五日の条には、「薬師堂では極月（十二月）七日より八日に本堂で祈禱を行っていたが、寒風の節、参詣者も難儀しているため、今月七・八日の祭祀日に替えた」とも記されています。



秋田県指定有形文化財「北家御日記」

さらに文化十三年（一八一六）七月十八日には「八月八日は御障日のため、八日前後の日程に替える」とあり、実際この年の祭祀は七日に行われています。二年後の文政元年（一八一八）以降は、祭祀の記述は八月六日に記されるようになりました。

日記は明治に入っても続きます。太陽暦への移行を経た明治七年（一八七四）九月十七日には、「これまで神明社の神輿は六月十五日、薬師の神輿を八月六日に行っていたが、薬師は廃して神明

の神輿を今日（旧暦八月六日）行うことにした」とあります。こうして神明社と薬師堂の祭典が同時期に行われるようになり、祭りはほぼ現在の形となりました。

今回は日程の変遷にかかわる記事のみを紹介しましたが、ほかにも祭りの賑わう様子や、やまの細かい描写がみられます。中には祭りへの並々ならぬこだわりや勇ましさも伝わってくる記述も…。興味を持たれた方は、ぜひ十月十七日（木）から始まるアーカイブズ講座（全4回）にお越しください！

【鍋島 真】

古文書こぼればなし

米代川舟運の事ども

〜銅と木材の川路と日本海物流〜

この夏は日本中が豪雨災害に見舞われ、秋田県でも尊い命が失われてしまいました。亡くなられた方々のご冥福と、被災された地域の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

* * *

古来から秋田の南北を流れ、物資運搬の大動脈であった雄物川・米代川で展開された舟運のあらましは、その河口で海運に連結される物資の集散地である土崎・能代両港の出入物資の検査によつてうかがうことができます。ですが、肝心なことはそれが海運と連結されてどこに運ばれ、全国的にはどのような役割を果たしているのかということではないかと思われまふ。

今回はそれらについて、米代川舟運物資から秋田色の強い木材と銅に焦点を絞って話してみることにはいたしました。

秋田の杉と豊臣政権のことなど

秋田の杉が文書で確認できるのは、佐竹義宣の前の領主である秋田実季の時代からです。

号 天正十九年（一五九一）、東北の検地を終えた豊臣秀吉は秋田地方の諸領主の知行高を確定しました。実季には知行地として五二、四〇〇石を安堵したほか、二六、二四五石の太閤蔵入地を設定し、実季を代官に任じました。秋田の地に太閤蔵入地が設定されたのは、どうやら秀吉への秋田杉運上の諸経費に充てるためであったらしく、「秋田家文書」にはその算用状が残

っています。これらの算用状によれば、文禄二年（一五九三）から慶長四年（一五九九）までに、大安宅船材・淀舟材・伏見作事用板などが上納されております。

大安宅船は秀吉が海外出兵で使用した軍船、淀舟は京・大坂間の淀川で就航した舟、伏見作事御用板は秀吉の都城ともいえる伏見城の普請に使用した板材で、いずれも太閤秀吉の政権基盤をなす建造物の部材として使われたのです。



秋田県立博物館所蔵「柚子造材之画」
米代川では上流で製材した材木を筏に組み、下流まで運んでいた。

ところが、こうした秋田の杉も江戸後期には不振を極め、「経済秘録」（混架538―8）記載の文化年中の能代湊移出品では全体のわずか二％に落ち込みます。渋江政光が「山は国の宝なり」の遺言の後段で述べたとされる「山の衰えは国の衰えなり」の気配が濃厚でした。

このような山林資源の枯渇に対して藩政改革で名高い九代藩主佐竹義和は、文化八年（一八一）三公七民といった画期的な分収率を導入し、農民の収入増を担保し、植林意欲を喚起したのです。

秋田の銅と長崎貿易

次は「経済秘録」掲載能代湊移出品資第一位（五一・三％）の鉱産物についての話です。

もちろんこれは阿仁銅山産出銅と思われるが、実は江戸前期には、南部領尾去沢銅山産出銅も秋田領十二所までは牛馬で運ばれ、そこから米代川に積み出されて能代に運ばれていたのです。これは、南部藩によつて変更された米代川のコースの再興を願う文書が、尾去沢に今なお残されていることから分かります（渡部「近世米代川舟運と南部領銅の廻銅」『秋田県立博物館研究報告』第一号）。明和二年（一七六五）、南部藩は尾去沢銅山を藩営鉱山としたことを契機に、銅を野辺地まで陸送し、野辺地湊から積み出すことに変更したのです。

さてこうして海運で運ばれた銅は幕府の長崎貿易の輸出品として注目されます。特に田沼意次が長崎貿易の相手国である清国とオランダとの貿易決済を銅七割・俵物三割に決定したことによつて、銅は日本最大の輸出品になりました。阿仁銅山は一時は上知令で幕府への返上の危機に直面しますが、意次によつて沙汰止みとなりました。

かくて長崎貿易における銅の流通量では、文政元年（一八一八）には秋田銅が三〇・八％、盛岡銅が三二・二％を占め、これらの銅は東南アジアで活用されたらしいことなどが近年わかってきました。

米代川を賑わした銅舟はアジアの歴史ともかかわっていた。こうした認識は地域史を考察する上でも極めて大切なことですね。

【渡部紘一】